

年頭に当たって：「ファーストフード」よりも「スローフード」

新世紀の一年は、イチローの大活躍、小泉政権の誕生、その異常なほどの支持率の高さ、アメリカでの同時多発テロの衝撃など、何か新しい時代を予感させる出来事が続いた。一方で、わが国の経済は、その失業率の上昇に見られるように、20世紀のバブル経済の後遺症に苦しんでいる。

他方、林業の分野では、森林・林業基本法が成立し、本格的に地域林政、公益林政の時代を迎えようとしている。新法は相変わらず総花的で、20世紀をどのように総括し、林業の将来をどのように見ているのか、その核心が不分明である。

さて、近年、「ファーストフード」に代わって、「スローフード」という言葉が出回り始めている。その意味するところは、都会で忙しく働いている人が、たまには、家族や友人と農村に出かけて、ゆっくりと時間をかけて古里の食の味を楽しむ。食事を作る人と食べる人が一体となって、食づくりもしくは食事のプロセスを共有する。ということらしい。これに対して、ファーストフードという言葉には、文字通り、効率や速さの臭いがつきまわっている。換言すれば、本来、「コト」であるはずの食事が「モノ」の次元に換言され、その歴史性や背景、文脈を失っている。コトがモノに断片化され、直列的に「足し合わされる」ようになると、その有機性や関係性、対話性は失われ、バブル経済の次元に墮してしまう。断片化された飼料の輸入から始まった狂牛病問題もこのことと無縁ではない。

話は、新春早々から小難しくなったが、私の言わんとするところは、森林・林業の世界、中でも、森林施業計画は、本来、コト的なスローの分野であり、慌ててファースト化を進め、人と森林の分離（森林離れ、山離れ、過剰なヴァーチャル化）を来すのは得策でないと考えからである。その意味では、森林GISフォーラムが、毎年、地域セミナーを開催し、産官民の間の対話を通して、健全なGIS導入の道を模索していることは大変時宜を得ていると思う。昨年末には、2001年にふさわしく、岐阜市の「ふれ合い会館」で開催された岐阜セミナーに、県、森林組合、メーカー、森林研究所、大学などから多数の方が参加され、GIS導入の実態と今後の方向をめぐって情報交換をする事が出来た。企画、運営に当たって、多大の労力をいただいた岐阜県森林研究所の古川邦明氏をはじめとする関係各位に深謝する次第である。

最後に、事務局を代表して本フォーラムへの皆様の一層のご支援をお願いし、年頭の挨拶とさせていただきます。

会長 箕輪光博（東京大学大学院）

東京シンポジウム2002のお知らせ

2月6日（水） 東大農学部弥生講堂（東京都文京区弥生 1-1-1）
詳細は8ページをご覧ください。

年頭のご挨拶

国土地図株式会社
社長 大塚 冀一

明けましておめでとうございます。世の中の変化はアナログからデジタルへ移行しており、近頃ではパソコンや携帯電話、テレビゲームなどデジタル製品が盛況です。確かにこれらの技術が発達した事で、便利な世の中になったことは認めます。そして知らず知らずのうちにこれらの恩恵に浴していますが、しかし『ちょっと待てよ』と思うことが有ります。デジタルは二進法を用いてすべての情報を0か1に置き換え伝達する方法です。要するに白か黒しか答えがないと言うことで、物事がすべて白か黒かはっきり出来ればこれほど楽な事は有りません。私はある本で豊臣秀吉を日本史上最も巧みに人の心を捉えた「人蕩（ひとたら）し」の天才と評しているのを読んだ事があります。その本では司馬遼太郎の「新史太閤記」の中に、秀吉の「人蕩」の場面が多く出てくると書かれています。敵国である美濃の軍略家、竹中半兵衛を織田方に迎えようとするくだりである。牢人に身を変えて潜入し、半兵衛を訪ねた秀吉に対し、「お肝の太いことだ。ここから生きて戻れるとお思いになっての事ですか」と半兵衛は目を細める。秀吉は驚いたふうを見せ、「生死の事など考えても居なかった。貴方に会いたいと言う一念で西美濃の奥まで来てしまった。我ながらうかつでござった。」と答えると「うかつでしたな」と半兵衛も秀吉の無邪気さにつりこまれて笑った。

このように人の心と心の中のやりとりで人を心服させる「人蕩」などデジタルの世界で出来るものではないでしょうか。私達はデジタルの恩恵を浴

すあまり、人情の機微を解せなくなってしまうのではないかと、こんな短慮的に思う事はデジタルアレルギーなのではないでしょうか。もう少し二進法ではなく人間関係を重視した方向で時計を止めて欲しいと願っております。

温室効果ガス削減への
GISの貢献を

株式会社 パスコ
平田更一

新年を迎えるにあたって、一言ご挨拶申し上げます。

昨年11月、気候変動枠組み条約第7回締約国会議（COP7）は、難産の末京都議定書の運用ルールを全体会議で採択、本年（2002）からの議定書発効を目指して各国の批准を待つばかりとなった。この中で、特に注目されたのはロシアの森林吸収分をいかに評価するかということであった。

わが国は熱帯林の最大輸入国であり、その後カナダ、ロシア等の北方林の輸入に頼っている状況にある。しかし、ソ連崩壊後のロシアにおける森林の分布、材積量の算出などは余り調査されていないのも事実である。COP6などでも温室効果ガスの排出量の多いアメリカ、EU、日本などの炭酸ガス排出量削減が話題を浴びているが、北方林の森林現存量の把握は余り注目されていない。厳しい環境に成立する生態系の中の森林、熱帯林の二の舞は踏みたくないものである。

リモートセンシング、GISなどの地球環境問題解決の技術が進歩した今日、グローバルな視野に立った森林の現状を正確に捉え、長期的な管理計画の上での森林の利用を検討すべき時

と思われる。京都議定書のスタートの年にあたり実効ある運用のため、温室効果ガス削減へ森林GISが大きく貢献することを願っている。

森林業務の運用を推進/サポート致します。

本年も昨年同様にご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

年頭にあたって

株式会社キャディックス
横山 猶吉

年頭にあたって

事務局 佐野真琴

新年明けましておめでとうございます。

昨年は同時多発テロや狂牛病などといった景気回復のマイナスになる要因が多く発生し「先行き不安な年」でした。今年は是非、景気回復の元で明るい年を過ごせるように願っております。

昨年は「森林計画制度がスタートして50周年」を迎えたと伺っています。一つの節目を迎え、今年は新たなスタートの時期にあたると思われます。GISが都道府県の森林分野に導入され始めて約10年になります。システム(ハード/ソフト)は日進月歩で変化して行きます。10年前と比較するとハード/ソフト共に大きく変化しました。これから10年経過すると、さらに大きく変化していると予想されます。

今後、GISは色々と変化して行くと思われませんが方向性としては

オープン・ソフトウェアアーキテクチャ

+

専門分野におけるシステム構築技術/サービス(コンサルタント)

が重要だと認識しております。

弊社はその時代に最適な最新技術・資源(ハード/ソフトなどの環境)の利活用と過去に経験し培ったノウハウをシステム構築に活かし、

明けましておめでとうございます。本年も森林GISフォーラムをよろしくお願いいたします。私が事務局のお手伝いをするようになって1年6ヶ月あまりとなり、この間、地域セミナーを2回、東京シンポジウムを1回開催させていただきました。私の印象では、この期間に起こった制度的なものに起因する、都道府県の森林GISから市町村の森林GISへの広がりとともに、本フォーラムへの参加者が増加傾向にあるように思います。今後は、市町村の森林GISが普及し、本フォーラムの重要性が増すとともに、GISというツールのさらなる発展的利用(地図情報の管理からGISを利用した解析へ)へも本フォーラムが貢献してゆきたいと思っております。

<< 原稿募集中 >>

会員のみなさまからの原稿を募集しています。内容は「地域からの便り」など当フォーラムに関係することなら何でも結構です。薄謝を謹呈いたします。表題、所属、お名前、本文(21文字×30行、60行、90行、120行)をテキストファイルにして、電子メールかFDで事務局までお送りください。

平成13年度中部地区地域セミナー **森林 GIS フォーラム地域セミナー in 岐阜** の
概要

日時：2001年12月3日(月) 10:00～16:30

会場：岐阜県民ふれあい会館 3F 大会議室

岐阜県森林GIS運用状況と今後の取り組み

岐阜県農山村整備政策課農山村情報係長 水谷嘉宏

岐阜県においては、平成9年度に「岐阜県GIS導入研究会」「同技術部会」を設立し、平成12年度までに「導入指針」「データ整備・更新指針」「空間データ発注仕様書」「岐阜県域統合型GIS基本設計書」を取りまとめてきた。導入指針の中で唱われたGISセンターについては、本年11月に(財)建設研修センター内に「ふるさと地理情報センター」が設立され、共用空間データの県民等へ公開に向けた体制が整いつつある。

県の森林GISは、これらの作業に先行するかたちで、主として森林簿・森林計画図の更新・作成を目的に開発を行い平成10年10月より運用を開始したが、運用開始後も以下の機能等の追加を行っている。

- ・ 図面データのDXFファイル出力
- ・ 流木災害監視地域判定のための処理
50mメッシュデータの整備、地質データの整備
判定テーブルの作成
- ・ 森林のゾーニング判定用テーブルの作成
- ・ 山地災害危険地データの整備
- ・ 高分解能衛星(イコノス)画像データの活用

このほか、一部の地域であるが森林計画図(等高線等)のベクター化を試みた。

当県の森林GISは、現状では森林GISと称するより森林計画GISと表現したほうが適当であり、対象業務が比較的限られていると認識している。そのため、業務原課からの新たな要求に対しては個別の対応が必要となっている。

当面の課題についても、

- ・ ふるさと地図情報センターとのデータ受け渡し
(G-XMLもしくはShapeファイルへの変換・取り込み)
- ・ 詳細な高さデータの取得と利用
(森林基本図のベクター化と小流域・溪流線・傾斜などの判定)
- ・ 農地(農業振興地域)のGISデータとの相互利用
(県の組織再編に伴い、森林GISと農地GISの管理を当係が行うため。)
- ・ 現地機関等へのGISデータの利用業務の展開

があげられる。

なお、森林GIS以外の業務も含めて、森林関係の現行の情報処理業務は「森林プロジェクト」として再開発に着手されており、これらにより、本来の森林GISに進化していくと期待している。

システムの開発時には総合的で多機能なものを求めがちであるが、処理するためのデータ(情報)の整備と更新が最重要であることを維持管理に携わる中で痛感している。

三重県森林GISについて

三重県環境部森林保全課森林管理グループ 山田長生

三重県では、平成12年度より一部モデル地域で、県独自の森林ゾーニングを実施し、森林を環境林と生産林に区分しました。平成13年度は、その結果にもとづき、県下一円の森林ゾーニングを実施しています。

そのためには、森林に関する様々な情報を数値化し、地図化することが求められます。それを実現するための手段として、平成9年度より森林GISの開発に取り組みました。平成11年度には、全県分の森林基本図、森林計画図、空中写真、森林簿の入力を実施して基本システムを整備し、平成12年度にはサブシステムとして治山・林道・保安林・林地開発・県行造林の森林行政情報、そして、そのほかに環境行政情報として、水道水源、廃棄物処理場位置、温泉泉源、アメダス、国土利用計画図、土地利用規制図、植生図等のデータ整備を進めました。

また、一人一台パソコンの普及により、職員一人ずつに一台のパソコンが割り当てられており、森林GISを利用したい職員が、使える環境を整備することから、WebGIといった形態のGISを運用しています。

森林GISの運用には、データの更新が必要不可欠であり、それは情報の発生源で行うことが、作業の効率化を図ることができ、精度を落とさずして集約できるとの考え方から、できるだけ職員が自前でできるシステム及び体制作りを構築しています。

県で作成したデータは、市町村・森林組合に、無償で提供しています。近年、市町村・森林組合でも、GISの有用性が認識されつつあり、今後は、森林簿等の精度を高めるためにも、関係団体からのデータのフィードバックがスムーズにできる体制作りを構築する必要があります。

また、本年10月から、森林GISで整備したデータの一部を、インターネットを利用して、県民の皆様にも広く情報公開しました。三重県では、さらに情報公開を進めて、適正な森林管理を進めていきます。

(三重県森林GISのアドレス <http://www.forest-gis.pref.miw.jp/>)

森林GIS開発の現状と今後の展開

株式会社キャディックス IT事業本部 横山 猶吉

弊社は、これまで新潟県、熊本県、島根県、岐阜県及び長崎県（敬称略：導入順）向け森林情報システム（森林GIS）の開発に携わってきた経験から、森林GISを次のようにとらえている。

・森林情報システムとは

森林情報システムとは、単なるコンピュータシステムではない

コンピュータシステムを活用した森林業務の運用全般の仕組み

- ・森林が有している様々な機能を高度に発揮させる
- ・持続可能な森林経営を推進する
- ・多様な森林作りをする

三重県で来年度から導入される森林環境創造事業においても、地域の協議会等でこの森林GISを活用してゾーニング作業を進めていきたいと思っています。

また、各施業地についてGPSを利用した座標管理をすることにより、世代交代により所有山林の所在がわからなくなった場合の現地確認と、森林計画図上での位置の確認及び訂正をどのように行っていくかが今後の課題になっています。

以上の事を考慮しながら、県・市町村・森林組合がより効率的な活用がで鼓るよう、今後の森林簿等のデータ更新をどのような方法で三重県としていくかを早急に確立したいと思います。

また、各種施業を円滑に進めるために、森林所有者との日常のやり取りの中で、職員のだれでもが簡単に利用できる森林GISシステムを早く確立したいと思います。

森林GISに対する現場からの提言

白鳥町森林組合 参事 笠野 和幸

導入の経緯

- 【要望(希望)】 森林組合がもつ膨大な森林情報の有効に活用を模索
現況と森林簿等台帳との情報の整合性を図り実体に即した管理台帳の必要性
既存の各種システムの連動性図り、森林情報の一元的管理の必要性
- 【導入方針】 基本図や航空写真と台帳の照合が簡易に行えること
情報の検索等が簡易に行えること
既存のシステムからの移行がスムーズに行えること
新たなGISをコアとしたシステムを開発
ペーパーシステムからデジタルシステムへ

システムの概要

- 地理情報システム(基幹システム)
森林簿検索。施業図検索。現場写真の登録(小班毎に30枚登録可能)
 - 測量図作成システム
- 現地調査で得られた森林境界等測量情報をGISに直ちに反映させる
- 造林補助金申請システム
- 森林施業の履歴として、自動的に森林簿(GISの)に反映させる。
- 以上の3システムを統合している。

組合での利用事例

- 森林所有者検索 組合員サービス(山林管理指導、事業確保)
- 間伐対象林分検索 間伐推進(事業の推進、事業計画・管理、山林整備推進)
- 現況写真のデータベース化 受託林の施工管理
- 測量データのデータベース化 " 、境界の明確化

明らかになった問題点

1. システムの問題点 検索項目の検討 操作性の問題 システムの連動性

2. データの問題点 森林簿所有者の相違 林班ポリゴンの問題 林小班界の相違

今後への提言

県のシステムとの連携を図りデータの共通化により精度の高い森林簿を樹立
森林の現況を明確に把握するため森林簿・森林計画図・実測図・現況写真の一元化。
森林施業計画と事業実績(履歴)のリンクによる現場施業に基づいた計画樹立支援。

将来の事業拡大

森林施業の営業はもとより、今後GISとGPSを組み合わせる事により山林の地籍測量調査への事業拡大も行って行きたいと考えている。

森林GISフォーラム

東京シンポジウム2002のお知らせ

テーマ：デモで実感、最新「森林GIS」
(今回はデモを中心としたものとして企画しました)

1. 日時：2002年2月6日(水) 13:30~16:00
2. 会場：東京都文京区弥生1-1-1 東京大学農学部弥生講堂
3. 参加費：無料
4. 申し込み方法：事前登録制 ご氏名(ふりがな)、ご所属、ご連絡先の住所、TEL、
FAXを電子メールまたはFAXで下記事務局佐野宛。 締め切り：1月31日
5. 申込先：森林GISフォーラム事務局(森林総合研究所企画室 担当：佐野真琴)
FAX 0298-74-8507

プログラム

- 第1部 講演 13:30~13:40 開会のご挨拶 森林GISフォーラム会長
13:40~13:55 ご挨拶 林野庁計画課 課長補佐 今泉祐治
13:55~14:40 「島根県における森林GISの現状と今後の展望」
島根県林業管理課 主幹 江角淳
- 第2部 GISデモ 14:40~16:00

森林GISフォーラム
ニューズレター Vol. 21
発行日 2002年1月10日
編集人 佐野真琴
発行人 梅沢光一

森林GISフォーラム事務局
〒305-8687 茨城県稲敷郡笠崎町松の里1
森林総合研究所企画調整部 企画室内
TEL:0298(73)3211 FAX:0298(74)8507

ホームページ <http://fgisf.ac.affrc.go.jp/ForGIS.html>